

## 平成23年度共同研究の概要（成果報告書抜粋）

研究種目：若手奨励研究

研究代表者：衣笠 利彦（鳥取大学 農学部・助教）

研究分担者：なし

研究題目（和文）：

モンゴル乾燥草原における車両のわだち形成後の植生回復に対する埋土種子集団の寄与

研究概要（和文）：

モンゴルでは道路の舗装化が進んでおらず、未舗装道路の形成による草原の裸地化が、黄砂や砂嵐の一因となっている。未舗装道路における植生回復は、埋土種子の発芽に大きく依存すると考えられる。われわれは前年度、一年生草本が優占する草原において埋土種子の調査を行い、埋土種子の大半が *Chenopodium* 属一年草で占められていることが明らかにした。しかし一般に埋土種子集団の種組成は地上植生の種組成に大きく影響されるため、植生タイプの違いにより埋土種子集団の種構成が異なり、植生回復のプロセスにも違いが生じる可能性が考えられる。そこで本年度は、一年生草本中心の草原に加え、多年生草本中心の草原でも調査を行い、植生タイプの違いによる埋土種子の構成の違いを明らかにし、未舗装道路放棄後の植生回復可能性の違いを評価した。

放牧圧が比較的高く一年生草本が優占する Bayan-Onjuul 村周辺の草原と、そこから南西に約 15km 離れた放牧圧の低い多年生草原で、埋土種子の調査を行った。

一年生草原でも多年生草原でも堆積砂中に埋土種子の大部分が存在していた。また、どちらの草原でも埋土種子はほぼすべて *Chenopodium* 属一年草で構成されていた。したがってわだちの植生回復は地上部植生にかかわらず *Chenopodium* 属一年草に大きく依存しており、風による *Chenopodium* 属一年草の種子の二次散布が、モンゴル草原における植生回復に大きく影響すると考えられた。